香川・下川津（しもかわず）遺跡

1 所在地　香川県坂出市川津町
2 調査期間　一九八五年（昭60）五月～一九八七年一〇月
3 発掘機関　香川県教育委員会
4 調査担当者　大山真充　他
5 遺跡の種類　集落跡
6 遺跡の年代　弥生時代前期前半～室町時代末
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

下川津遺跡は香川県中部、丸亀平野東北縁の海抜五m前後の微高地群とその間を網目状に流れる旧河道に広がる。この付近は旧讃岐国鵜足郡川津郷に比定されており、遺跡は川津郷の北端に位置する。なお川津郷は天平勝宝二年（七五〇）に東大寺に封戸として勅施入されたこと、同地に鎌倉時代に春日大社領河津荘が存在したことが文献史料から知られる。このことは本遺跡の性格を考える上で重要な点である。

（丸　亀）

下川津遺跡は瀬戸中央道坂出インターチェンジ建設にともない、約九八、〇〇〇㎡を調査し、集落は調査範囲だけでも、四つの微高地に広がることが確認できた。現在整理作業を進めており、八九年度末に報告書を刊行する予定である。

集落は長期間にわたって微高地上に断続的に営まれ、周辺旧河道部では中世以前の小規模な水田跡を確認している。集落規模が最も拡大するのは古墳時代末～平安時代である。六世紀後半には竪穴住居跡・掘立柱建物群が複数単位並存し、七世紀初頭には集落内に柵列・溝によって区画された敷地を持ち、規格的に配置された大型建物群が出現し、金銅製圭頭大刀把頭片を出土している。この後少なくとも平安時代中期までは同様の大型建物群が地点を移しながら継続的に築造され、これを中核に集落が営まれる。代表的な遺物に圭頭大刀片の他、円面硯（七世紀末～八世紀）・墨書土器（何れも判読不能　七世紀末～平安時代後期）・水晶製鈴（丸鞆　平安時代前半）・越州窯青磁（同）等がある。また隣接する旧河道より、犂・壺鐙・鞍・鋤先（七世紀）、斎串類（七～八世紀）、人形（八～九世紀）等多数の木製品を出土している。この遺跡を郡衙等と想定するには、建物配置・規模等の点で躊躇を覚えるが、少なくとも首長層の居宅を含む中核的集落ではある。また鵜足郡北端の臨海部の物資集散の要地に立地することから、これに関わる公的施設をともなう可能性も残る。

木簡は断片・転用品を含めて五点確認したが、今回報告する一点を除き、他は欠損が著しく記載内容を読み取れない。何れも調査区東端の旧河道中より出土している。厳密な時期比定は困難であるが出土層位の検討等より七世紀前葉～八世紀中葉を想定している。木簡は先述の犂・斎串・壺鐙等を伴出し、七世紀後半に位置づけられる蓋然性が最も高い。

8　木簡の釈文・内容

(1)　秦人　秦マ　秦尓マ
（穿孔）
。秦人
□　□□」〔秦カ〕　(211)×40×3　081

長方形板の両端を丸く落とし、上部中央に小孔を穿つ。縁辺部に部分的な破損が認められるが、保存状態は概ね良好である。樹種はヒノキ。文字等は刀子様の鋭利な工具で浅く刻みつけて表現している。小孔下に折れ線状の文様を配し、その下に三行一二字を刻む。

刻みが浅く判読に困難な部分が多いが上の様に解した。いずれも秦氏系氏族名であろうが、「秦尓部」は今のところ他に例がない。

記載方法の特殊性、懸垂孔とおぼしき小孔や意味不明の折れ線表現から、祭祀行為に関わる可能性をとりあえず想定しておく。

ところで、旧讃岐国地域の秦氏系氏族分布は、現在知られる限りでは、高松平野部の三木郡・香川郡など東半部に多い。鵜足郡では、岸俊男氏が指摘した法隆寺領関連資料から推定されている。また鵜足郡では、多くの絁を貢納したことが文献に見えており、秦氏と絁生産の密接な関わりが指摘されている点でも興味深い資料であろう。

なお今回の資料では「人」と「部」が同時に見えるが、直木孝次郎氏の研究によれば、両者間には一定の階層差があるといわれる。先述の通り、下川津遺跡の該期集落の構成にも、階層差が認められ、「人」と「部」の格差を検討する資料となるやもしれない。

9　関係文献

香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅶ～Ⅸ―下川津遺跡Ⅰ～Ⅲ―』（一九八六～一九八八年）

（大久保徹也）